
シーナの事情

イチル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シーナの事情

【Nコード】

N4873Y

【作者名】

イチル

【あらすじ】

レキルス王国の王都ガレストラにある本屋『サクラ』を営むのは、日本から能力を持って異世界トリップしてきた少女、田宮椎名。これは本屋（でも裏では情報屋）な彼女とそれを取り巻く周りの人達の友情恋愛その他もろもろの事情。*****毎回23時に更新します

1 彼女の事情

ガレストラは今日も賑わいをみせていた。

多くの歩行者よる騒音の中に売り子娘の少し高めの声が響き、人々は思い思いの店で互いに有益になるよう買い物をする。

ある人が興味なさげに視線を外したモノを、他の人が輝いた瞳で見つめたり。

大金を軽く払う人もいれば、お金が足りずに溜息をつく人もいる。その顔は十人十色。

レキルス王国の主な産業は武器。

その王都であるこの街は、良い武器といえればガレストラ、と言われるほど有名で、それを扱う騎士たちの腕も大陸一だ。

そんな街だからもちろん殆どの店が武器屋。

そのかわり武器屋の競争率は激しいが、他の店の中には街に一軒しかない店などもあるので、そういった店は客を一人占めできるのだ。

2

そんな街に一軒しかない本屋『サクラ』を営んでいるのが、この私。

シーナ・ターミヤ、もとい田宮^{たみや} 椎奈^{ししな}。

3年前、15歳のときに日本から異世界トリップしてきた本好きの少女だ。

この店は、その際に神様から貰ったもの。

本に関わる仕事につくのは小さい頃からの夢だった。

もともと私は知識欲が他人と比べて凄くあり、世界の全てを知りたいと常々思っていた。

まあ、それは無理だとは分かってはいたが。

体が弱く生まれた頃から入院中だった事もあり、よく本を読んでいたら段々とその魅力にとりつかれてしまった。

そんな所を神様に気に入られて強制的に異世界トリップさせられた。願いを3つ叶えてあげよう。

そう言われて、言った願いの1つ目が「本屋の店長になりたい」である。

どうやって叶えてくれるのかな〜と想像していたら、トリップした先に助けたおじいさんが経営していた本屋を「もう自分は年だから」と言い、くれたのだ。

そのおじいさんは今、隣国にいる息子夫婦の元に住んでいる。

2つ目の願いは「身体能力の向上」。

理由は今まで外で遊んだ事があまりなかったため、向こうではめいっっぱい楽しもうと思ったからだ。

あの神様はついでに魔力も最高にサービスしてくれた。

おもいきり楽しんでこい、と。

ちなみに隠しているが魔力量と質は世界で1番、剣技では宙に投げた玉ねぎのみじん切りを2秒でできるくらいだ。

チートやばい、そして便利。

おかげで今は異例の早さでギルドランクBだ。

3つ目は「その世界の全てが知りたい」。

国家の秘密から隣の家の晩御飯まで、全て。

そう言ったとき神様は満足気に微笑んで、一冊の本をくれた。今、私の横においてある鈍色の本がそうだ。

表紙の絵も題名もない中身も白紙なこの本は、実はこの世界の知識の塊。

知りたいと思った情報だけを載せてくれる神様特製の本。

例えば私が「あの誰だっけ」と思いながら本を開くと、その人物の名前と生年月日、家族構成や育ち方、周りからの評判まで書かれている。

プライバシー皆無もいいところ。

まあ、こんな能力もあって実は私は本屋情報屋だったりする。

カランコロン

「いらっしやい、レオンさん。今日はどんな本をお探しですか？」

店の中に入ってきたのは少し波打ったサラサラの金髪に透きとおる海色の瞳の美青年。

それはまるで御伽話に出てくる王子様のような……っていつか王子様だ。

正真正銘この国の皇太子であるレディオン・リンド・フルノ・レキルス殿下。

先ほどの『レオン』という名前は偽名だ。

彼はたまに病弱な妹姫のために身分を隠して本を買いにきている。

勿論、私の情報本にかかれば素性などすぐ分かるので、身分を隠しても意味がない。

別に誰これ構わず個人情報を見ているわけではなく、最初にこの店に来たときに平民と言つわりにはやけに身なりがいいから気になったのだ。

「こんにちは、シーナ。今日も妹のために本を買いに来ただけだど……」

「じゃあ、この本なんてどうですか？今流行ってる恋愛小説。私のオススメですよ」

私が近くの棚から取り出したのは桃色の本。

ノイズというこの本の作者は他国の間でも有名で、毎回ベタで甘い

ラブストーリーを書くので女性受けがいい。
そんな大物小説家の彼女は私の友人でもあるのだが、この話はまたの機会に。

レオンは本を手に取りパラパラと中を見る。

そして、最後まで見終わった後のこちらへ向ける視線はとても満足気だ。

それに対して私もニッコリと微笑むと、途端にレオンの顔が真っ赤になる。

何故に？

たまにこういった事があつたのだが、理由が分からない。

そのたびに王様ってポーカーフェイスが大切なのではないのか、と彼の将来が少し心配になる。

そして、しばらくの間の沈黙。

2人ともが何を話そうか考えているときに、急に本屋のドアが勢いよく開いた。

「シーナいる？」

入ってきたのは茶色の髪をポニーテールにくくった女。

その手には朱色の宝石がついた銀色の杖。

彼女はアイリス・キュート。

Aランク冒険者の魔法使いの私の友人で、レオンの元クラスメイトでもある。

レオンが通っていた学校、となると一国の皇太子が通うような学校なのだが、彼女は実は孤児院出身だ。

魔力量の高さをかわれて無理矢理入学させられたらしい。

その卒業後には数多の勧誘を振り切って冒険者になり、今は各地を転々と巡っている。

彼女と出会ったのは私が暇つぶしにギルドで依頼を受けていたとき、討伐対象も倒してさあ帰ろうというときに邪竜と戦っている彼女と出会った。

苦戦していたようなので手助けをしたのが切欠だった。

という話は閑話休題、またいつか。

「いらつしゃいませ、アイリス。今回はどんなものをお探しで？」

助かった、アイリス。

あの気まずい空気は苦手だ。

とりあえず、まだ顔がほんのりと赤いレオンは置いて、アイリスの相手しよう。

それにしてもレオンは美形だから頬を染めると乙女にしか見えない。

「ん？レオンはいいの？まあいいや、この本の修理を頼める？」

そう言って渡されたのは特に壊れた様子もない普通の本。

これのどこに直さないといけない所があるかというところ……そんなものは、ない。

だが私は困った顔もせず、逆にニヤリと笑った。

「分かりました。少々お待ちください」

そういうと、私はその本と傍らの鈍色の情報本を持って店の奥に入った。

さて、情報屋としての仕事がんばりますか。

『壊れた本を直してほしい』

それは私に情報屋としての仕事をしてほしい、という意味。

本の33ページ目に欲しい情報とお金を挟んで私に渡す。

私はそれを受け取り、そのお金に対応する情報を書き本の22ページ目にそれを挟み、客に渡す。

それが情報屋『サクラ』の利用方法である。

私はアイリスから受け取った本を開いた。

左下に33と記されているページには、ルール通りに紙と紙幣があった。

9

今回の依頼内容は『ローズ・テファ・メルシスについて』。

ついにここまでできたかあ、と思う。

ローズ・テファ・メルシスというのはアイリスの生き別れの母親の事。

彼女の母親は隣国の侯爵家の末娘で平民の男と恋をしてアイリスができ駆け落ちをした。

しかし彼女の父親がそれを許さず、男を殺して末娘を連れて帰ったのだ。

母親は父親が来る事に気づき、父が来る前にアイリスを孤児院に預

けたのだ。

この事は神製の情報本で知ったのだが、多分彼女は孤児院の院長から聞いたのだろう。

取り出した紙に、もうここ3年で使い慣れた羽とインクを使って情報を書く。

本来なら個人情報、ましてや貴族の料金は高いのだが、アイリスは私の友人なのでサービスでいくつか情報を付け加えて、本に挟んだ。店の方に出るとアイリスとレオンがなにかを喋っていたがすぐに止まり、アイリスは少し緊張した顔でこちらに顔を向ける。
あ、レオンの事を忘れていた。

「シーナ…見せてもらってもいい？」

「どうぞ」

本を渡す。

その表紙には『護身術の全て』と題名が書かれており、毎回この本を持ってくるのが彼女らしい。

受け取った本をパタリとめくり、22ページ目を開く。

アイリスは内容を読み進めていき…泣きそうな顔になった。

「…相変わらず、仕事が早くて…助かるよ」

少し涙声になりながらアイリスは告げた。

そして、パタリと本を閉じて出入り口に向かう。

「ご利用ありがとうございます。次はお一人できてくださいね」
頭を下げた。

すると、アイリスは吃驚したように目を開いて、その後笑いながら言った。

「分かった、ありがとう。…がんばれよ」

ん、何を？と思いながらも店を出て行ったアイリスを見送った。

また、店内に沈黙。

残されたのは私とレオン。

案の定、彼は一連の出来事の意味が分からず頭にハテナマークを浮かべてこちらを見ていた。

私はそれに曖昧に笑う。

「本、買っていますか？」

そう言っつて、桃色の恋愛小説を取り出した。

最後に、その日『サクラ』でノイズの新作が一冊売れた事と、後日銀の杖を持った魔法使いがもう1人女性を連れて来店した事をここに言っておく。

閑話 1 - アイリスの視点(前書き)

第1話のアイリス視点のお話です。

閑話 1 - アイリスの視点

「シーナいる？」

私は扉が壊れるんじゃないかという勢いで店内に入った。

ミシリと音がしたので少し心配になったが、今はそんなことはどうでもいい。

『サクラ』の中にはシーナともう1人、

私の学友でこの国の皇太子でもあるレディオン・リンド・フルノ・レキルスがいた。

レディオンは驚いたように此方を見たが、シーナは安心したように私に話しかける。

「っていつか何でレディオンは乙女みたいに頬を染めてんの？」

「いらっしやいませ、アイリス。今回はどんなものをお探して？」

部屋にシーナの鈴のような声が響く。

レディオンは放置するらしい。

「ん？レオンはいいの？まあいいや、この本の修理を頼める？」

渡したのはここを利用するときに使っている『護身術の全て』。

この本しか持っていないから仕方がないが。

「分かりました。少々お待ちください」

シーナは気のせいかなやりと笑って2冊の本を持って店の奥に入った。

今回シーナに頼んだのはローズ・テファ・メルシスについての情報だ。

孤児院の院長から聞いたことだが、彼女は私の母親だという。なんでも切羽詰まった顔でまだ生まれたばかりの私を預けに来たらしい。

「アイリスって本読むのか？」

隣に立つレディオオンが聞いてくる。

ああ、ここではレオンだっけ？

レディオオンは彼女が情報屋である事を知らないの、皇太子だとバシっている事も知らないのだ。

…こいつシーナの事好きなくせに何にも知らないな。

「友人に頼まれたんだよ」

「アイリスにそんな事頼む友人なんていたんだな」

「どういう意味」

「いや、別に」

レディオオンの物言いに、少しイラっとする。

「ハッキリ言えよな」

「いいだろ、別に」

「そんなんだからシーナに振り向いて貰えないんだよ」

「な…っ！」

何故知っている、っていう顔をしている。

いや、バレバレだから。

見ている方が焦れたく、こちらとしては早々に彼らにはくっついてもらいたいのだが。

…そういえばシーナはこいつの事をどう思っているんだろう。今度聞いてみるか。

ガチャ

レディオンが何か言いかけたとき、シーナが戻ってきた。

一瞬でレディオンの事を忘れ、シーナの方を見る。

手にある先程私が渡した本には、きつと情報が書かれた紙が挟まっている。

私の親の事が書かれた、紙が。

「シーナ…見せてもらってもいい？」

「どうぞ」

本を受け取ってめくる私の手は、情けない事に震えている。

そのページには、いろいろな事が書かれていた。

ローズ・テファ・メルシスの実家、家族、性格から駆け落ちした事、夫が殺されて子供をキュート孤児院に預けた事。

そして…一番最後に書かれている事を見て、泣きそうになった。

彼女は今も自分の子どもを探している。
貴方は望まれた子ですよ。

「…相変わらず、仕事が早くて…助かるよ」

シーナは知っていたのだろう。

私はその事を気にしていたのを。

孤児院にいる子は望まれない子が多いから。

「次はお二人できてくださいね」

そう言ったシーナの声に、私は勿論と思いつながら返事をした。

閑話 過去の話(前書き)

またまたアイリス視点の閑話です。

今回は椎奈とアイリスの出会いのお話です。

閑話 過去の話

シーナは不思議な子だ。

彼女の経営する『サクラ』は本屋でもあり情報屋でもある。

私は本が苦手なのでそれは買わないが、情報屋はよく利用する。

『サクラ』は全く外れない情報屋として裏ではとても有名だ。

私がシーナと出会ったのは今から約3年前。

依頼とある森に住みついた邪竜を退治しに行ったときの事だった。今までに倒した事のある邪竜は上級魔法光魔法を放てば1発で倒せたので、今回もそれで大丈夫だと思っていた。

だが、その邪竜は他のものとは桁外れに強く、私が今まで戦ってきたのは邪竜の中でも下位のものにすぎないと気づいた。

どうやら私は自分は強さを自惚れていたらしい。

魔力切れで体が重くなり、どうしようかと悩んでいた頃、唐突に視界が光った。

そして鼓膜が破れるほどの爆音になる。

同時に、反射的に目を瞑っていたため見えなかったが、微かに邪竜の苦しい咆哮が聞こえた気がした。

音が鳴り止んで、恐る恐る目を開けると信じられない光景が瞳に映った。

先程まで私が苦戦していた邪竜がいた場所には、その跡形もない巨大な黒い炭の塊があった。

一瞬、思考が停止する。

「あ、大丈夫？」

視界の端にひよつこりと顔を出した少女が、私の顔を覗きこむ。艶やかな黒髪に宝石のように輝く黒眼。

整った顔だちをして、どこか神秘的な雰囲気を出す美少女がそこにいた。

まさか、こんな少女が、邪竜を殺した？

「これは…あなたがやったの？」

「うん、勝手に参加しちゃってごめんね。倒してよかった？」

「いや…助かったけど」

信じられない。

見たところこの子はエルフでも魔族でもなさそうだし、多分…人間だ。

人間のまだ10代前半くらいの子が邪竜、しかも中級以上の強さのそれに普通勝てるか？

答えは否、ありえない。

「怪我してるね」

そう言った途端に私の体が光り、傷が治っていく。

この子はあるな強力な魔法を使った後に、まだ魔法が使えるのか？しかも無詠唱で？

「あなたは誰？」

「私は田宮…じゃなくて、シーナ・ターミヤ。あなたは？」

「…アイリス・キュート」

この時の私は、まさかシーナが無二の親友になるうとは思っていなかった。

2 エリシアの病

今日はお店の定休日だ。

ついでに、この世界の時間について説明しておく。

1年は365日くらいで6ヶ月、1ヶ月は約60日で、紫月、青月、緑月、黄月、橙月、赤月と並ぶ。

1週間は6日で、月の名前と同じように、紫の日、青の日、緑の日…となる。

1日24時間、1時間60分、1分60秒というしくみ。

ほぼ地球と同じだ。

『サクラ』の定休日は毎月第一、第五の紫の日と青の日である。

今日は紫の日、つまり連続2日間の休暇の1日目。

する事は毎回決まっています。

ギルドに行って依頼を受けまくる。

そして運動しまくる、これにつきる。

休暇なら休んだ方がいいのかもしれないが、普段の仕事でカウンタ―に座つてのんびりする事が多いので休暇くらいは動きたい。

そして前の世界ではできなかった事をしたいのだ。

— *

— *

ギルド内に入ると騒がしかった室内が一瞬静まり返り、視線がこちらを向く。

だがそれも一瞬で、部屋はまた元の五月蠅さを取り戻す。

女性、ましてやまだ十代の子どもの冒険者は珍しいので仕方がないのかもしれないが、ジロジロと私を見るのはやめてほしい。そう思いながら受付まで歩いていく。

「あら、シーナじゃないの。久しぶりね」

向かった先にいるのは薄緑色の長髪をゆったりと三つ編みにした優しい女性。

私の馴染みのギルド受付嬢であるネリーだ。

年齢は25歳で夫と子どもがいる立派な母親なのだが、子どもが学校に通い始めて時間が空いのでギルドマスターである祖父に頼んで受付嬢をしているという、少し変わった人。

たまに夫との惚気話や親バカな発言をしなければ、仕事のできる美人さんである。

「ネリーさん、何かいい依頼ありますか」

「そうねえ…あ、これなんてどうかしら。新作ケーキの試食、条件は十代の女性」

ペラリと私の前に差し出した紙の依頼者の欄には王宮御用達と呼ばれる超有名菓子店『パティス』の文字。

ちよっと…いや、かなり気になるが今回はやめておく。

とにかく今は運動したい、遊びたい。

…いや、べつに体重が気になるとかじゃなくて。

「…できれば討伐系でお願いします」

「あら、もつたいない」

彼女は紙をファイルにしまうと、別の灰色のファイルから似たような紙を取り出した。

確かそのファイルは極秘の依頼とかが入っていたはずだ。

私に見せたそれには、とんでもない事が書いてあった。

脱走を手伝ってください

依頼主：エリシア・リンド・リア・レキルス

報酬：お互い話し合って決めます

内容：みんなが過保護なので城の外に出れません。城下に行ってみたいので、その為の脱走を手伝ってください。

…この依頼主って、もしかして第一王女のエリシア姫ですか？

あ、この依頼内容を見た時点で、断る事はできないから。

ネリーにそう言われて泣く泣く受けたこの依頼。

第一王女の城脱走のお手伝いは、一歩間違えれば王女誘拐事件の犯人となるほど危険な仕事だ。

信頼できる人にしか任せられないため困っていたらしいが、信頼されている事に喜べばいいのか、それとも面倒な依頼を押しつけられた事を悲しめばいいのか。

あと、これがバレたらレオンにどんな顔して会えばいいのか…。

「はあ」

鈍色の情報本を見ながら溜息をつく。

今見ているのは勿論エリシア姫の事。

犯罪者にならないためにも彼女の事は知っておかなければいけない。

エリシア・リンド・リア・レキルス

レキルス王国第一王女

金髪に緑の瞳をもつ10歳

幼い頃からクリエッタ病にかかっており、周囲の過保護により城を
でた事がない

クリエツタ病ってなに？
思うと反対側のページに情報が出てくる。

以下の事は創造主にしか知られていない

クリエツタ病

体内の魔力の器が大きすぎるものが神竜の涙を飲むとかかる事がある
通常なら外に逃がす力まで受け止めようとするため身体が脆くなる
が、死ぬ事はない
患者は常に体の何処かに痛みを感じる
コリの果汁を聖水で薄めた薬を飲むと治る

この情報は神様しか知らない情報だったらしい。

どつりで皆が「王女は原因不明の病にかかっている」と言っている
わけだ。

神竜の涙なんてそうそう飲むものじゃないし、その力を全て受け
止めるほどの魔力量なんて世界に数人しかいないだろうから、当
り前だな。

今まで発病した人がいなかったのだろう。

しかし、コリの果汁か。

あの果实には確か食べた人の魔力の一部を体外に放つ効果があつた
はず、その効果を聖水で強めて身体に染み込ませるのか。
なるほど、普段は毒薬扱いされているから誰も飲ませなかったのだ
な。

パタン、と本を閉じて傍らに置く。

依頼を受け（させられ）たのが朝の早い時間だったので、今は午前9時ごろである。

窓の外ではいつもの半分くらいの人が歩いている。

「どうやって迎えに行こうかなあ……」

依頼によるとエリシア姫は昼食を食べ終えた昼の1時に私の部屋に忍び込んで迎えに来てほしいらしい。

王城に忍び込むことの難しさを彼女は絶対に分かっているだろう。ギルドの者がどうかは、私の胸元にある受付で渡された銀のペンダントで確かめる。

その後城下に脱走、いろいろ買い物をしたりして夕方6時の夕食までに城に帰るらしい。

もしも誰かにバレた場合は、王女がギルドの依頼書を見せてきちんと説明するそうだ。

すごい計画だ、普通のお姫様が考えるとは思えない。

「とりあえず、まだ時間があるから薬でも買いに行こう」

実は、コリの果汁も聖水もそこらの店で買えるような物だったりする。

目の前に立ちはだかるのはこの国の中心である立派な王城。
私は今からここに侵入するところだ。

方法は簡単。

まず光魔法で透明になり、体の表面に魔力を纏って城の周りを覆う
バリアを通過。

そのまま風魔法で王女の部屋まで飛んでいく。

危険そうに見えるが、魔力量と質が世界一の私に不可能などない。

— * — * —

というわけで、無事に到着。

バルコニーに降りると、窓から部屋の中の様子を伺う。

部屋にいるのはベッドに腰掛けて周りをキョロキョロとみている少女。
女。

彼女がエリシア姫なのだろう。

情報通りの腰まであるさらさらの金髪にエメラルドの瞳の美少女だ。

部屋の周りを探ると何人か護衛の方が隠れてたので、彼等には王女
が寝ている幻覚を見せる魔法をかけた。

そして、自分の光魔法を解いて窓をノックする。

コンコン

エリシア姫は吃驚したようにこちらを振り向き私の胸のペンダントを見ると、キラキラした目をしてバルコニーに近づいた。

そして口パクで訴える。

ちよつとまってて、と。

彼女はそのまま隣の部屋へ入っていった。

しばらくすると王女が現れた。

王族が着ることはないような庶民の服装で。

少し驚いている私を気にせず、彼女はバルコニーの窓を開けて勢いよく私に飛びついてきた。

「依頼を受けてくれてありがとう！ねえ、早く行きましょう！」

私に顔を向けるエリシア姫の頬は紅色に染まり、すごく可愛い。その笑顔につられるように私も微笑み、王女の手を取る。

「しつかり掴まっついて」

少女が頷いた瞬間、周りの風景が王城の一室から見慣れた室内に変わる。

足元には淡い光を放つ魔方陣。

エリシア姫は一瞬で場所が移動した事に驚いて、目を見開いて周りを見る。

「ここは私の家だから安心して。少し話し合いをしましょう」

そう言ってソファに座るように受けて促した。

「私の事はシーナと呼んでね、エリシア様」

微笑みながらエリシア姫の前にオレンジ色のジュースを置く。
彼女はそれを恐る恐る口に運んで飲んだ後、美味しい、と呟いた。
ありがとう、それは私が作ったジュースなの。

「エリシアでいいわ。そんな呼び方をしたら街で目立ってしまう」

「分かった。じゃあエリシア、あなたは何色が好き？」

いきなりの質問の意味が分からない様子だったが、彼女は不思議そうな顔で「ピンク」と答えた。
すると、彼女の髪がピンク色に染まった。

「えっ！？すごい！」

「魔法で髪と瞳をピンク色にしたのよ。帰るときには戻してあげるから」

「うん！」

笑うエリシアはまさに天使とした言いようがないほど可愛いくて、
レオンがわざわざ城下に来てまで本を買う理由がよく分かった。
こんなに可愛い妹のためなら、何でもしてあげたくなるはずだわ。

「シーナ！これほしい！」

城下町に行ったエリシアは、それはもうはしゃぎまくった。

あれはなに？

これは？

かわいい！

ほしい！

おいしそう！

途中で、あれ？この子病気じゃなかったっけ？と何度も思った。それを感じさせないくらい彼女は騒いで、その顔は幸せそうだ。

今回エリシアが指さしたのは銀のしおり。

色の銀ではなく、材料が銀のしおりだ。

それには丁寧な装飾が施されており、上品な感じになっている。

右下には猫のシルエットがあり、猫の目の部分には緑色の小粒の寶石がはめられている。

「エリシアと同じ目の色ね。私が買ってあげる。お姉さん、これください」

女性の店員さんにお金を渡して商品を受け取ると、それをエリシアに渡す。

彼女は今まで食べ物を買ってもそれ以外は買わなかった。

持って帰ると家族や侍女に怪しまれるからだ。

だが、このくらいなら構わないだろう。

「あ、ありがとう…！」

エリシアはうつとりとしおりを見つめる。
買ってあげて良かった、と思っていると、ふとエリシアが眉根を寄せる。

「エリシア、大丈夫？」

急にしゃがみ込んだ彼女が心配で、背中に手を当てる。
そして、彼女の体が熱くなっている事と、魔力が漏れ出ている事に気がついた。
まさか、クリエッタ病の発作？

「…っ…！…げほっ」

吐血。

エリシアの顔は真っ青で、それとは対照的に口にあてた彼女の手は真っ赤で。
本当は、この依頼は受けるべきではなかったのではないかと、凄く後悔した。

焦った私はエリシアを連れて急いで家に転移。

机の上に置いたままにしていた透明な液体の入ったビンを掴み、エリシアに渡した。

「エリシア！これ飲んで！」

言った瞬間、エリシアはビンをひったくるように奪い、口に流し込んだ。

口から零れた液体が、血と混ざりピンク色になって顎をつたう。

「う、ああ、あ、あ、あ、ああああ、！！！！」

彼女の喉がゴクリと鳴った途端、叫びだしたエリシアから膨大な魔力が溢れだした。

チートな私でも冷や汗を垂らして近づく事さえできないくらい大量な、濃い魔力。

多分、これはエリシアが今まで受け止めきれなかった神竜の涙の魔力だ。

先程エリシアに飲ませたのはコリの果汁を聖水で薄めたクリエツタ病の薬。

今まで体内に溜めていた魔力が、薬のせいで一気に流れているのだ。

エリシアは今10歳。

10年分の魔力が一気に解放された彼女には激しい痛みがくる。

子どもが耐えられるような痛みはないはずだ。

でも、私には見守る事しかできない。

自分の無力さを感じた。

急にエリシアの悲鳴が止まった。

そのまま気絶した彼女を、私は慌てて駆け寄って支えた。

何時の間にか魔法が解けて金髪に戻ったエリシアの髪が、さらりと私の腕を滑った。

エリシアはすうすうと寝息をたてていたため、死んではいないの
らう。

彼女をソファに下ろすと、私は部屋を見わたした。

エリシアの魔力が勢いよく溢れたお陰で、部屋の中はぐちゃぐちゃ
になっていた。

あちこちに本が投げだされ、硝子の破片があちこちに飛び、机上で
はインクが盛大に零れている。

だが、こんなときも魔法があれば大丈夫。

魔法というのはイメージが大切だから、数時間前まで綺麗だった部
屋を想像しながら瞬きをする。

すると、一瞬で部屋は元通りに。

この世界の人間は詠唱しなければ魔法は発動しないと信じこんでい
るため毎回長つたらしい言葉を並べるが、実際はそんな事ないのだ。
まあ、それ相応の魔力が必要になるのも確かだが、私には関係ない。

ふとエリシアの方を見て、起きたときに目が覚めるように柑橘系の
ジュースを用意しておこうと思い、キッチンに向かった。

*
|*
|

5時。

だんだん外が暗くなってきた。

やばい、6時まででに城に帰せれるかな、と思いながらエリシアの髪を撫でていると、彼女の長いまつげがピクリと揺れた。

驚いて手を止めると、エリシアの目がゆっくりと開いた。

中から見えたエメラルドの瞳は、状況を掴めずに左右に動いている。

それを見たとき、私も今まで緊張していたのだろう、糸が切れたように涙を流し始めてガバリとエリシアに抱きついた。

「よかったああ〜」

エリシアはそんな私に戸惑っているようだった。

それから暫くそんな姿勢が続いたが、我に返った私が慌てて体を離れた事で終わる。

すごく恥ずかしい。

私の黒歴史が一件追加された。

エリシアとは反対側のソファに座り、起き上がった彼女にジュースを飲むよう勧めた。

「さて、エリシア体は大丈夫？」

ジュースを一口飲んだ彼女に聞く。

エリシアは頷きながら答えた。

「うん、大丈夫」

「どこも痛くない？」

「うん、どこも……あれ？どこも痛くない。なんで？」

エリシアは不思議そうに自分の体を見る。

その様子だと、薬はちゃんと効いたみたいだ。

クリエツタ病の症状の1つに患者は常に体の何処かに痛みを感じる、
というものがある。

痛みを感じないという事は病気が治ったという事だ。

だが、それだと少しエリシアに言わなければならない事がある。

「エリシア、確か依頼の報酬は話し合いで決めるはずよね」

「うん」

「私は報酬を受け取らない代わりに、貴方に黙ってもらいたい事があるの」

私は人差し指を立てる。

「絶対に私の事を他人に話さないで」

言葉に力を入れたせいか、エリシアの肩が恐怖で揺れた。

そしてコクコクと何度も頷く。

…そんなに冷や汗流すほど怖かった？

軽くシヨックを受けた。

その日、王都での会話は1つの話題で埋め尽くされていた。

エリシア第一王女の病気が治った。

だが、何故治ったのかは分からないらしい。

ある人は言う。

魔の森にすむ不老不死の魔女が気まぐれに治したのだ。

それに他の人は言う。

いや、神竜様が治してくれたのだらう。

他にも王女が自力で治した、実は病気だった事は嘘だった、などいろいろあったが最終的に残ったのは、神様が治してくれた説である。どこから広まったのかは分からないが、彼女の病気は神が治した、

エリシア第一王女は神様に愛された子である。

そんな噂が幅広く、国外までにも広がった。

エリシアの魔力量が常人の数倍高い事もそれを手伝っているのだらう。

とにかく、今のガレストラではエリシア王女は聖女扱いされている。

2日間の休暇も明けた緑の日の正午ごろ。

私は用意していた昼食を食べ終えて、カウンターで本を読んでいた。

鈍色の情報本には、この本読みたいな、と思いながら開くと、その本の内容が一字一句違わずに書かれているという素晴らしい機能があるので、読もうと思えば誰かが綴ったラブレターまで読める優れたものだ。

読んだ事はないけれど。

それはまあいいとして、本を読んでいるときに客が来た。

眼鏡をかけ、品のある服装に身を包んだ中年の男。

その男の事を知っている私は、あの事だろうなあ、と思いながらも笑顔で接客する。

「いらっしやいませ」

「お久しぶりですねターミヤ嬢。ところで本の修理を頼めますか？」

入ってくるなりそれはないだろう。

差し出された本を受け取って、その場でパラパラとめくる。

その行動に吃驚している様子の男は無視。

33ページ目にはやはり紙と大金が挟んであり、紙には予想通りの内容。

『エリシア王女の病気が治った件について』

それを見て心の中で溜息をついて、本を閉じてそのまま男に返す。

「申し訳ありません。その件については私も全く分からないので」

「口封じでもされましたか？」

「なんの事でしょう？」

ニコリ笑顔で対応。

間違っても、それは自分がしました、なんて言えるわけがない。
暫く見えない火花を散らした後、溜息をついたのは相手の男。
負けた

「……では次はこれをお願いします。代金はその本の分でもいいです」

次に渡されたのは『ティガー伯爵家の最近の動きについての情報』。
よし、諦めたか。

「かしこまりました。宰相さんも大変ですね」

そう、彼はこの国の宰相なのだ。
名前はロンド。

仕事に真面目だが愛妻家なのが有名で、最近は娘が嫁に行った件で
一騒動あったそうだ。

なんでも婿の家は隣国ロシエンの王族なのに剣で切りつけようとしたとか。

彼等は恋愛結婚なため、それも笑って済まされたが政略結婚なら戦争ものだ。

結婚式の日には「小さい頃はパパと結婚すると言っていたのに」と泣きながら言っていたらしい。

「貴方が楽に情報を渡してくれれば少しは楽になるのですが」

「なんの事やら分かりませんね。はい、どうぞ」

会話中にも私は紙に情報をかいて本に挟みロンドに渡した。

勿論お金は回収済みだ。

受け取ったロンドはその中身を確かめた後、礼を言って店を出ていった。

「今日も賑やかだなあ……」

ロンドが店の出入り口の扉を開けたときに漏れた街の騒音に、私は少し苦笑した。

3 クッキーの日

まず生地を作って麺棒で平に4ミリくらいに伸ばしたら、それを型で抜いた後、魔法でキツネ色を目安に焼く。

「できた…！」

簡単クッキーのできあがり。

「わあ、すごい。食べていい？」

「いいよ、店番のお礼ね」

今この世界は、日本でいうところの冬だ。

店の窓から雪が降る外の様子を見ているときに何の脈絡もなく、ふと思った。

「甘いものが食べたいなあ、と。」

けれど店を無人にするわけにもいかないから、丁度よく店に来たアイリスにしばらくの店番を頼んだ。

クッキーはプレーンとチョコの2種類を200個ほど作り、5分の1は自分用で残りは客に配る事にする。

5個ずつ袋に入れて可愛くラッピングして大きめの籠に乗せると、それをカウンターの上に置いた。

籠に白いリボンを結ぶと見栄えもいい。

うん、完璧。

「おいしい！」

隣ではアイリスがクッキーを頬張っている。

ああ、こぼさないようにしてよ。

店内にはいつも浄化の魔法をかけているので少々こぼしても大丈夫なのだが、せつかく作ったクッキーがもったいない。

作った側としては最後のひと欠片まできちんと食べてほしいのだ。

カランコロン

「こんにちは」

しばらくすると学生服を着た客が来店する。

ここは武器の街なので本を買う人は少ない。

だから客の7割が学生だ。

幸いこの近くには大規模な学園があり、店は儲かっている方だと思う。

情報屋や、ギルドの依頼を受けたりもしているので尚更だ。

特に情報料が結構高いので、1日で2万ニア（だいたい200万円）稼いだときは少し罪悪感を覚えた。

私は何も苦勞してないのに、こんなに儲けて大丈夫なのか、と。

ちなみに、今でもその思考は抜けていない。

「これ買います」

さっき店に入ってきた学生が、2冊の本を持って私のいるカウンタ

ーに来た。

どちらも難しめの薬学の本である事から、彼女が薬師になりたい事が予想出来る。

学生からお金を受け取ると、それをポケットに入れるフリをしながら亜空間に仕舞い、本に刻まれている、勝手に本を店の外に持ち出されないための防犯術式を解除する。

そして、傍らの籠からクツキーの袋を1つ取り、本と一緒に彼女に渡した。

「当店をご利用してくださった方に今日だけ配っているんです。よかったらどうぞ」

ありがとう、と言いながら彼女はそれを受け取る。

どこの世界の人間も限定品には弱いらしく笑顔で去っていく女学生に、心の内で宣伝よろしくお願いしまーす、と呟いた。

この後の時間帯にいつもギルドでバイトをしている彼女は、おしゃべりな性格で有名だから。

3 クッキーの日（後書き）

雪って粉砂糖みたいでおいしそうですよね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4873y/>

シーナの事情

2011年12月22日23時54分発行